第２回県立高等学校の在り方に関する基本計画策定委員会　意見まとめ(R5.9.20)

◆基本理念、課題、考え方等◆

○「「有徳の人」の育成」という基本理念の下、第三次長期計画は、平成 30 年度から令和 10 年度までの高校に関する取組を実施する計画になっているが、今回、中間時点で見直すに当たり、何が実現できて何が実現できていないかを押さえると同時に、新たに出てきた様々な要因、目指すべき内容や課題などを整理した上で、何をどのように修正したのか第三次長期計画との対応関係を分かりやすく記載するとよい。

○「有徳の人」は以前から基本理念に掲げられており、第三次長期計画と基本方針との関係付けがなされていると思うので、関係性を再確認する形で押さえればよいのではないか。

○基本計画案では、教育大綱については脚注で出ているが、教育振興基本計画については特に触れていない。教育振興基本計画では、重点取組の中に「高等学校等の魅力化・特色化」について記されているので、この基本計画が今後５年間で具体的にどのようなことを進めていく計画であるのかをきちんと示すとよい。

◆基本計画の方向性と主な取組◆

○静岡県では、各高校のスクール・ミッションを非常に尊重しており、そのスクール・ミッションを達成するための手法の一つにＩＣＴを活用した教育があり、さらにそのスクール・ミッションを達成するためにどのように利用するかというのは、各高校に委ねている。こうした特徴をもう少し全面的に出していくと特色が出てくるのではないか。

○モデルとなるＩＣＴ活用授業を先生方が授業参観に行くは難しいので、既に好事例を動画コンテンツとして配信していることが、他県と比べてより特徴的な取組である。こうした具体的な取組をもっと文面に起こしていくと特徴が出る。

○ＡＩやメタバースは、既にＸＲという技術の方向に今動いているので、「最新技術」の文言を「ＸＲ技術」にすると、より最先端の方向につながっていく。

○全体を通して、どういった文言を加えると静岡県らしさという特徴が明確になるかというところを、もう少し煮詰めていく必要がある。

○例えば農業高校と工業高校がＩＣＴでつながってプロジェクトを立ち上げて実際に物を作っていくなど、実技等を伴う活動に関しても共同利用施設等を設置して複数の学校の生徒が共に学べる環境を整備する必要がある。ＩＣＴ技術を使って情報でつなぐ以外に、物づくりの拠点も様々なところに作って欲しい。

○「対面の学びとＩＣＴを活用した学びとのベストミックスの検討」の表現について、対面の学びでもＩＣＴは活用するので、対面でも実態に応じて積極的に活用を推進していく意味に読み取れる表現にするとよい。

○全体的に静岡県立高校としてのこだわりを持たせたい。静岡県の地域性、県民性、歴史、産業、社会環境や自然環境など、静岡県らしさを織り込んだ表現になると県立高校の意義が表せるのではないか。

○高校単独で考えると、都道府県で大きな違いはないので、静岡県らしさを出すのは結構難しい。自然環境や産業を高校とどうつないでいくかというところに静岡県らしさを出せるとよい。そういう意味では、共通の５番目にある大学や企業との連続性のある教育活動などの取組に静岡県らしさを出せるのではないか。

○高校生の就職希望者の９割が県内に就職している現状は、今後も維持するべきであり、もっと打ち出した方がよい。それだけ就職先が静岡県にあることは幸せなことである。また、大学生が一旦県外に出たとしても、どうやってＵターン者を増やすか、高校段階で何ができるのかを基本計画に盛り込めるとよい。

○高校生の就職希望者の９割が県内企業に就職するということだが、企業側からするとまだまだ人が足りない状況である。専門高校から進学する高校生も多い中、進学しなくても働ける企業はたくさんあるので、専門高校の生徒がもっと県内企業に就職してもらえる手立てを考えて欲しい。

○賀茂地区などでは、就職先があまり多くない現況があるため、関東や東京方面に出ていってしまう実態がある。問題は高校生というより、県外に出た大学生がその後静岡県に帰ってきてくれないところにある。

○静岡県のジェンダーギャップ指数は全国と比較して悪い数値となっている。また、女子生徒の理系離れは国でも課題となっており、国際的な競争力を高めていくために、理系を選択する女子生徒を増やす取組について計画に盛り込んで欲しい。

○静岡県というのはどういう県であって、それが自分のキャリアを考えていくときにどういうパスがあるか。特に、県外に出ても戻ってくるという選択ができるような進路指導にもう少し力を入れていく必要がある。いろいろな選択肢があるが、戻ってきた後も静岡で生かせることを学べるカリキュラムは県としてすごく大事である。

○適正規模については、まずクラス数が基本にあり、それに掛ける人数で生徒数がある。例えば 30 人学級にしてもクラス数を維持するという手法も考えられるので、1 学級の人数が 40 人か 30 人かというよりは、クラス数のほうが教育活動的には大事であるため、少人数学級について、今後検討してもよいのではないか。

○各高校がいろいろな企業とつながって学校内で企業説明会などを始めているが、もっと活発に取り組んで欲しい。また、各高校のＰＴＡには様々な職業の方がいるので、そうした地域の人たちをもっと教育に活用して欲しい。

○施設・設備の面で、同窓会や後援会がしっかりしている県立高校は資金が潤沢にあるが、そうでない高校は本当に欲しいものが実際に設置されるのは２年後、３年後になることが多いので、予算規模を増やして欲しい。

○公立高校の校舎の老朽化が目立つ一方で、私立高校が新しい校舎を次々に建てるので、中学生はみんな私立高校に行きたいと思ってしまう。公立高校が地区の小学校と同じようになってきている感じがして寂しい。ハード面にもっと予算をかけて欲しい。

○地域連携に一生懸命な担当教員は、異動により次々に替わってしまうため、学校から地域へ出てくことは大変な環境になっている。それぞれの地域に、地域と学校をつなぐコーディネーターを配置し、担当教員が替わっても継続した関係づくりが可能な仕組みにすると地域との連携が更に取りやすくなる。

○静岡県はＩＣＴ環境の整備がかなり進んでいるので、県として統一した取組を実施するなど、恵まれた環境を生かした取組を計画に盛り込むとよいのではないか。

○ＩＣＴの環境整備が進み、使い勝手がよくなったので、次は使い方について考えていく段階である。コンテンツをどうするのか、統一されていないシステムをどうするかなど、教育委員会が少しリードしてくれると教員も安心して異動できる。

○ＩＣＴ活用について、研修で得たスキルを生かせる環境があって初めて研修の効果があるので、環境整備と研修を一体で実施する必要がある。静岡県のＩＣＴの環境整備はかなり進んでいるので、研修の効果がこれまで以上に高まることを期待している。

＜当日出席のオブザーバー意見＞

○基本理念にある「有徳の人」が、学習指導要領で示す「生きる力」やＯＥＣＤと共通していると書いてあるが、学習指導要領と「有徳の人」がどのようにリンクするのかについては、しっかりとした議論や丁寧な説明が必要ではないか。単に意義や方向性が共通しているだけだと、読んだ人は全く分からない。

○「実学系高校」という言い方は現在では基本的にしない。「専門高校」や「専門教育を主とする学科」、或いは「職業教育を主とする専門学科」という言い方が学習指導要領としては適切な表現なので確認する必要がある。

○別冊資料に岐阜県の資料があるが、岐阜県はＩＣＴに関する取組が進んでいるので、ぜひ岐阜県に追いつくように今後も努力して欲しい。

○「有徳の人」を高校生レベルの年代に落とし込んだときに、各学校のスクール・ミッションに基づいて学校生活を送って卒業した生徒が、一定程度「有徳」だと評価されるような教育活動にどう落とし込むかが非常に大事である。「有徳」で企業や地域に貢献できる高校生像とはどういう人材か、共通項があると明確になるのではないか。

○教育ＤＸは、今後少子化により小規模校化が避けられない中では不可欠な技術であり、ＩＣＴ活用能力を身に付けさせることは必須である。一方、大多数の中学生が個人のスマートフォンを所有する時代になってきているので、教える側が教育活動の中でアナログとデジタルの組み合わせを十分配慮しなければならない。

○メタバースとＸＲは同じではないので、ＡＩ・メタバース・ＸＲは横並びで書くとよい。ＡＩ・メタバース・ＸＲは、手段や便利なツールだが、使うだけではなく、本質的にどうやってつくられているのか、仕組みはどうなっているのかといったことを学ぶ力が大事である。

○ＢＹＯＤの導入が進む中、セキュリティーは非常に重要になってきているので、セキュリティーを充実させていくこと計画に盛り込んでいく必要がある。

○遠隔配信については、ハードウエアを整備すること自体は比較的容易であるが、それを使うことによって効果がどれぐらい出るのかをいかに測定していくのかが大きな課題である。

○探究学習の推進に関して、「①生徒」の共通項目での記載に加え、「③教育基盤」の「教員の在り方」にある教員のスキルアップ研修の充実について、幅広い外部人材との連携を含めて、もう少し強調してもよいのではないか。

○ＩＣＴの活用により、授業事例の動画コンテンツを共有して授業改善に生かす際、そのコンテンツを教員がどう受け止めて、それを参考に自分たちの学校や地域でどう展開していくのかを授業実践者と教員が双方向で話し合える環境があると、半歩先に進んだ形として見えるのではないか。特に、「③教育基盤」の「小規模校の在り方」の中でも共通して貢献する要素になり得るのではないか。

○インタラクティブな環境を構築する負担は大きいが、コンテンツの提供だけではないところを進めていく方向性もある。加えて、それをさらに分かりやすい形で内外に発信していくことで、静岡県らしさを伝えることができるのはないか。

○「③教育基盤」の「教員の在り方」では、コンプライアンスの推進の取組についても記載するとよい。実際に力を入れて拡充しており、基本理念で「有徳の人」を掲げている中で、教員もきちんと研修や研鑽を積んでいることが明確になると更によいのではないか。